

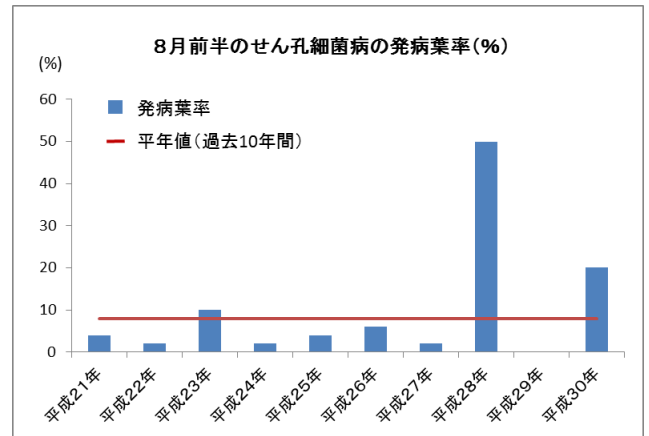
## せん孔細菌病（もも）の発生に注意

## 1 発生状況と今後の推移

近年、大阪府内のもも産地において、せん孔細菌病の発生が多くなっている。昨年8月上旬の巡回調査では、発病葉率が20%と過去10年間の平年値8%と比べ高くなった。

本病害は前年の秋期に降雨が多いと、病原菌の越冬量が増加する。昨年9月の0.5mm以上の降水量があった日数は17日で、過去10年間の平均11.4日より多くなった(地点:堺観測所)。

以上のことから、今春における本病原菌の越冬量が多くなっていると予想される。



## 2 生態と感染

- (1) 風雨によって病原菌が分散し感染が拡大する。葉や果実の傷口や気孔から病原菌が植物体内に侵入し感染する。
- (2) 病原菌は気温10～35℃で繁殖可能。25℃前後が最も繁殖しやすい。
- (3) 落葉痕部や枝の組織内にて潜伏状態で越冬する。
- (4) 越冬した病原菌は、春になり気温が上昇すると、増殖して春型枝病斑を形成し、その年の伝染源となる。

## 《春型枝病斑の特徴》

- ・枝が黒ずみ、やがてへこむ
- ・新梢が赤っぽくなる
- ・新梢の伸びが悪い



▲葉の病斑

▲春型枝病斑

## 3 防除対策

- (1) 春型枝病斑や発病葉は見つけ次第取り除き、園外で適切に処分する。
- (2) 地域の防除暦や下記(表1、表2)を参考に登録農薬を散布する。生育期の薬剤散布は10日間隔で実施する。降雨前のタイミングで散布すると効果的である。
- (3) 風当たりの強い園地では、防風ネットを設置するなどの対策を行う。
- (4) 収穫後もせん定等で発病部位を取り除くようにし、発病の多い園地では必ず秋期防除を実施する。秋期防除は登録のある無機銅剤等を、9月以降に2週間間隔で計3回散布する。

表1 開花前に使用するせん孔細菌病(もも)に登録のある主な薬剤

薬剤名 (成分)	FRAC コード	希釈倍数 (使用液量)	使用方法	使用時期	本剤の 使用回数
IC ボルドー412(銅)※	M01	30～50倍	散布	—	—
ムッシュボルドーDF(銅)	M01	500倍		開花前まで	—
カスミンボルドー／カッパーシン水和剤 (カスガマイシン・銅)	24・ M01	500倍		開花前まで	3回
Z ボルドー(銅)	M01	500倍		収穫後～開花前まで	—
コサイド3000(銅)	M01	1,000倍		開花前まで	—

※IC ボルドー412は薬害が生じるおそれがあるので、開花後～8月末までは使用しない。

表2 生育期に使用するせん孔細菌病(もも)に登録のある主な薬剤

薬剤名 (成分)	FRAC コード	希釈倍数 (使用液量)	使用方法	使用時期	本剤の 使用回数
アグリマイシン-100 (オキシテトラサイクリン・ストレプトマイシン)	41・25	1,500 倍	散布	収穫 60 日前まで	2 回
マイコシールド (オキシテトラサイクリン)	41	1,500～ 3,000 倍		収穫 21 日前まで	5 回
バリダシン液剤 5(バリダマイシン)	U18	500 倍		収穫 7 日前まで	4 回
チオノックフロアブル/ トレノックスフロアブル(チウラム)	M03	500 倍		収穫 7 日前まで	5 回
スターナ水和剤(オキシニック酸)	31	1,000 倍		収穫 7 日前まで	3 回
マスタピース水和剤 (シュードモナス ロデシア)	未	1,000～ 2,000 倍		前日まで	—

※アグリマイシン-100、マイコシールドは同じ有効成分(オキシテトラサイクリン)が含まれる。オキシテトラサイクリンの総使用回数は5回であるため、計画的に防除する。

※薬剤の収穫前日数に注意し、計画的に防除する。

- 大阪府環境農林水産部農政室推進課病虫害防除グループホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)
- 農林水産消費安全技術センター 農薬登録情報提供システム([http://www.acis.famic.go.jp/index\\_kensaku.htm](http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm))



病虫害防除グループ  
ホームページ



農林水産消費安全技術センター  
ホームページ